

令和4年2月 学校長だより 高千穂高校

令和4年2月1日

「何も咲かない寒い日は 下へ下へと根を伸ばせ
やがて 大きな花が咲く」

校長 佐伯浩美

2022年がスタートして1ヶ月が過ぎた。夕方6時頃まで明るくなった。子どもの頃には、ほとんど興味のなかった日の長さや天候、陽気といったものが、年を取ってくると気にとまる。日が長くなれば、気分も明るくなる。「晴れ晴れとして気持ちいい」「気が晴れない」「気分が曇りがち」「ここはどしゃ降り」など気分と天候を相関した表現が多くあることに気づく。4日は立春。春の始まりを告げる日ではあるが、三田井地区は、まだ一面真っ白(雪)になった日がない。このまま春が来るとは思えない。今しばらく、ヒートテック超極暖(下着)が頼りになる日が続くそう。

携帯のアラーム音に目が覚め、同時に激しい揺れ

震度5強。1月22日1時8分頃、寝たまま布団を頭にかぶり、地震の静まりを待った。揺れが治まると飛び起きて電気をつけ、室内の異常がないことにひと安心。テレビと携帯電話で、状況を確認する。外へ出て周囲を見渡す限り、被害はなさそう。隣接する学校寮の電気は消え、近所は落ち着いている。家に入り次の揺れに備えた。暗闇では、とっさに何もすることができなかった。この対応で良かったのか？考えた。夜が明けて、学校や農場の施設を見て回った。法面や校舎の亀裂、壁の剥がれ、落下物など、震度の大きさからすると大きな被害には至らずホッとしたが、後藤事務長、野尻事務主査(共に高千穂高校卒)は、被害報告、修繕見積り、業者決定、発注など新たな仕事が増える。事務職員も生徒が、夢を育むための環境充実に、縁の下の力持ちで頑張っている。

経営情報科が、福島県に体験ツアー

先端ICTを活用した県内で初めての先駆的モデル社会実装の遠隔イベントが行われた。コロナ感染症などで実現困難となっている県外への修学旅行やICTの面白さを学ぶ、新しい体験型教育の実演である。1月12日、3年2組34名は、福島県に設置されているアバター(オンラインで移動しながら景観を映す自分自身の分身)ロボットに高千穂高校T-Laboから接続。アバターロボットを実際に操作しながら、原発事故展示物などを自分の目や足で見回っている感覚の旅行を楽しんだ。

香港の大学生に高千穂を案内

特別クラブ「まちなか観光案内ボランティア」に所属する生徒12名が、高千穂の観光案内を買って出た。香港中文大学で日本語を学ぶ学生たちは、予定していた宮崎県への教育旅行ができず、オンライン研修を宮崎大学に依頼。オンライン研修の1コマ90分を高千穂高校生が担当した。世界農業遺産の紹介、神楽や書道をLIVEで配信。事前に実際にトロッコ列車や貸しボートに乗って撮影した動画は、遠隔で観光を体験させ楽しませた。英語や日本語を交えての交流も行った。

クラブ活動を通して、学び得た魅力ある地域の良さを世界に向けて発信することは、国際的感覚を高め、地域への愛着をさらに深める機会となっている。